



たぶんかきようせい

多文化共生のまちづくり

「ちがいがあふれるまちへ

ねん がつ にち すい
2023年9月6日(水)

19:00~20:30

かしましょうがっこう かい たもくてきしつ
加島小学校 2階 多目的室

こうし やまざきかずと

講師：山崎一人 (プレクラスコーディネーター)

現場へ!

あの事件繰り返さぬために

「外国ルーツ」の子を支える②

外国にルーツをもつ子どもを支える「Minnam」子ども教室の起源を語る。スタッフはいづも「あの事件」にふれる。教室立ち上げの前年、2013年に大阪市中央区の島之内地区で起きた、母子の無心死事件だ。

フィリピン人のシングルマザー（当時29）が7歳の長男、4歳の長女と心中を図り、屍がなくなつた。市の調査によると、生活保護受給者スワーカーが前年から家庭訪問をくり返し、母親は飲食店で夜の仕事をこなし、母子2人だけの生活で、母子の無心死事件だ。

事件が起きたのは4月15日。その9日前、母親と長男は市立南小の入学式に出席していた。当時の

校長、山崎一人（68）は、母親が翌日に学校を訪ねてきた姿を覚えていた。学用品の入った袋を見せて「お通算箱には何がいますか」と聞く。山崎は必要な文庫を伝え、担任に引き合わせた。「何かでよかったんか」。そんな思いが、いまも消えない。

南小は当時も、児童の半数ほどが外国にルーツをもつ。事件のあった4月に着任した山崎の目に、教員らは疲れ果てて見えた。学力テストの点数向上を求められ、日本籍習得の十分でない子も多い。夜勤くねくね、教員らと課題を話し合い、山崎は学校の外にも支えを求めた。

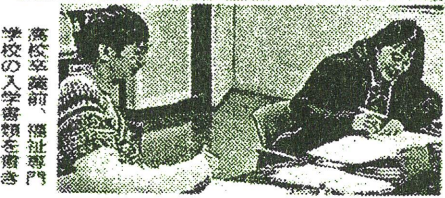
借りた子育て施設に会場を移した。当初は小学生が対象だったが、リキらが成長するにつれ、中学生、高校生にも対象を広げた。リキは中学生の1学期、学校を休みがちだった。「でも教室から足が遠のいたが、金が南をかけた。教室で受験勉強にとりくんだ。フィリピン人の母親との母子家庭で生活は楽ではなく、金が公的支援につなぐ役割を担った。リキは昨年、専門学校に入学。「金さんみたいな仕事ができたら」と、社会福祉士をめざす。教室のことを「第2のおうち」と言い、時々顔を見せる。



「Minnam」子ども教室で中学生の学習を見守る山崎一人（左）2020年6月、いずれも大阪市中央区



教室の休み時間、子どもたちと隣り合わせで遊ぶ金光敏（左）2019年7月



高校卒業前、福祉専門学校の入学書類を南小に教室を訪れ、保護者とおしゃべりするリキ（左）2020年2月

「今の自分がある」という。大阪で外国人支援を続けてきたメンバーらと山崎は話し合いを重ね、18年4月に学習支援教室の準備会を立ち上げた。ボランティアの研修会を開いて仲間を募り、金が行き届くようにした。

9月3日の火曜日の夜、1回目の教室は南小の会議室であった。山崎が外国ルーツの児童に声をかけ、10人が参加。当時小3だったリキ（19）は「学校に見たことない大人がいっぱい来て、なんか楽しかったすね」とふり返る。他の学校の子も来ることで、夏には中央区から

山崎は昨年春に退職した後、教室のスタッフを続けている。金は教室につながる親たちの生活相談を一手に引き受け、役所へ、病院へと忙しく動き回る。2人の心にあるのは「あの事件を二度とくり返さぬように」。その一念だ。

（取材協力：玉置太郎）